

太古から連綿と紡がれてきた細胞たちの中、塩基の螺旋の奥深くに、きつと寂しさは刻まれている。空腹のように眠気のように情欲のように、それよりも確かな憎しみのように、寂しさはその鎌首をもたげ静かに私の心のいちばん柔らかなところに狙いを定め、その切っ先を迷いなく向けてくる。そんなとき、決まって私は氷河期の夢を見る。世界の全てが凍り付き、私しかいなくなる夢を。

たった一人、誰の足音も聞こえずに、行く宛もなく歩いている。それがとても落ち着くから、ずっと一人で歩いていたと願った。見渡す限りの氷の中には、生き物たちが死に損ねて閉じ込められている。それぞれの祈りと願いは動きを封じられ、叶うことなく眠りにつく。

冷たい風が、私の足跡をかき消していく。僅かな間だけ誰かのものになって、すぐに誰のものでもなくなっていくらしい荒野は、土と命を優しく隔て、果てまで遠く広がっている。

その冷やかな沈黙が私のあとに続いていく。そこで、目が覚める。

「……おはよう」

初冬は隣でまだ眠っていた。見渡す限りに草花があしらわれ、その呼吸ひとつひとつで彩られたこの部屋で眠り続けるその姿は、なにかしらの呪いを受けたお姫様みたいだ。

けれど初冬はお姫様じゃなくて、私の上司で、恋人で、不真面目で大好きな人。だからもう一度だけほら、と形式的に頬をつついてそれでも起きないことを確認する。そのままゆっくりと撫でて、満足する。

「やっぱり粧緒ちゃん」

足の踏み場だけを残して茂っているアルストロメリアやミスミソウ、彼岸花に気をつけながら寝室から出てキッチンまで亘ると、清

森さんが手持ち無沙汰な様子で漂ってきた。こんなにちは、とだけ挨拶をしてから冷蔵庫を開き、材料を見繕う。朝食だけは私が作ることになっている。全部作りますと提案したらそういうの嫌い、と初冬に断られた。

「あ、おいしそう。私食べていい？」

「食べられるなら食べてみて下さい」

粧緒ちゃんはそのようなこと言う子じゃない、と清森さんが拗ねるけれど自業自得で、死んでからもう五年も経つ幽霊なのにまだびんぴんしているほうがおかしい。

作り終わる頃には初冬が目覚ましをかけていた。「……あ。おはよう粧緒」「おはようございます。もうお昼ですよ」「わたしが起きた時が朝だしわたしが寝る時が夜だよ……。寝ていい?」「せっかく私が出来たのに」「えー、じゃあわたしの好きなところ十個言つて。そしたらベッドから出てもいい」

自分のできることをこなしている間に極域海洋環境研究所に勤めるようになって、半年が経った頃だった。二年先輩の亜紀さんのケアレミスで作り直しになった書類の作業が終わって一息ついていたらところを、所長の笹川さん呼び出された。なんの疑いもなく所長室までのこのこついて行った私に、笹川さんが尋ねる。

「相原初冬って名前は知ってる?」

「あいはら、しょうと」

辛うじて、この極海研の人間だったことは覚えていた。入る前も入ってから、内緒で回される手紙に似た明らかな密やかさで、その名前は囁かれていた。ゆりかご理論という画期的かつ有益な新理論を構築した人で、念のためと論文を一度読んでみたけれど全くわからなかった。

そのくらいです、と答えると笹川さんは頷いて、「浅見ちゃん、今